孤独死 生絶現場

困窮を訴えない若者の増加

誰にも看取られず自宅で亡くなり、死後、変わり果てた姿で発見される「孤独死」。一昨年にNHKで無縁社会の実態が紹介されるや国民の大きな関心事になったが、ここへ来てその孤独死が相次いでいる。

今年1月、とある地方都市のことだ。50代の無職男性の遺体が自宅で発見された。死後約3カ月でミイラ化していたが、不思議なことに腐敗臭はしなかったという。この現場を見た遺品整理業『キーパーズ』社長の吉田太一氏は言う。

「古い木造アパートで、部屋には現金はもちろん、テレビもありませんでした。腐敗臭がしないということは、おそらくお腹に何も入っていなかったのでしょう。本人はこれまでも家賃の滞納が度々あったことから、大家さんもあまり気に留めなかったそうです。そのため、死後3カ月も放置されていたものと見られます」

そんな、あまりに寂しい孤独死と思われる事件は、その後も立て続けに起きた。

1月25日には、札幌市白石区の40代姉妹が自宅マンションで凍死しているのが発見された。姉が病死後、知的障害があった妹が自力で生活できなくなったと見られている。

2月20日、今度は、さいたま市で60歳代夫婦と30歳代の息子3人が餓死状態で見つかった。

「遺体は死後2カ月ほど経過しており、電気、ガスも止められていました。母親が近所の人に借金を頼むなどしていたようですが、民生委員への相談を勧められ、そのままになっていたようです」（社会部記者）

同日には45歳母親と4歳の障害児が東京都立川市で、さらに台東区でも90歳代と60歳代の父娘が、3月に入ってからは8日、またもや立川市で90歳代と60歳代の母娘、14日に埼玉県川口市で92歳母親と62歳息子が遺体で発見されている。

以前に孤独死を取材した記者が、その状況を語る。

「5年前、北九州市の出来事だったのですが、7月の暑い盛りで遺体は腐乱していました。その男性（52）は肝臓を害して病院通いしており、市での面接では『働けるが手持ち金がなく、生活も困窮している』と言い、一時、市の生活保護を受けていました。その後、再度、市の担当者と面談した際、『そろそろ働いてはどうか』という勧めを受け、生活保護の辞退届を提出。その2カ月後の死でした。男性は日記に、『働けないのに働けと言われた。おにぎりが食べたかった』と書いていたのです」

孤独死は、何も一般人に限ったことではない。3月8日には、元タレントの山口美江さん（享年51歳）が心不全で亡くなっていると

40代姉妹が発見された札幌市のマンション

ころを、親族によって発見されている。父親を亡くし独り暮らしだった。

「一口に孤独死といっても様々でしてね。老後に毅然と独りで生きてきたが、たまたま亡くなる際に自宅で息を引き取ったため、そのままになってしまった人、それに、行政の怠慢で死ななくてもいい人が亡くなるケースもある。一方、社会とのかかわりを持たず、生きる気力を失ってSOSを発信することなく亡くなる人もいる。今、いちばん問題なのは、孤独死そのものよりも生前の孤立した生活だと思います」（吉田氏）

高齢者から若者まで陥る 無縁社会の

若者に目を向ければ、20～40代の世代の孤独死に共通するキーワードは、「パソコン」だという。

「パソコンが数台あるのにテレビが一台もないケースも多い。一方的に情報を発信するテレビを必要ないとする人も増えているんです。また、コンビニの広がりで出来合いのものを温めたり、お湯を注ぐだけで食べられる『中食（なかしょく）』スタイルの食生活がどんどん増えている。結局、都会では人とかかわらなくても生活していけますからね」（同）

ある結婚情報サービス会社が今年、新成人を対象にアンケート調査をしたところ、「交際相手がいない」と回答した人が77％もいた。異性との交際歴のない人は47％に上っている。この数字も、〝孤独〟な若者が多いことを物語っている。

「原因としていちばん大きいのは、間違いなくゲームやパソコンにかかわっている時間が長いこと。熱中してしまうと時間のたつのも早く、本来、生活の中で人と出会うべき時間や様々な人と接っする機会が極端に減少してしまうのです。さらに怖いのは、その機器の中に自分に都合の良い性格の親友や彼女や彼氏を作ってしまう点。結果、自分が妥協したり我慢する必要がない環境になってしまう」（同）

一方、ノンフィクションライターの窪田順生氏は、中年の社会人の孤独死について言う。

「孤独死は昔からありました。ただ、不審死扱いや自殺扱いにされ、統計に出なかっただけで、急激に増えたわけではありません。無縁社会が話題になり、それが呼び水となって増えたところがある。そんな中、生きていくことに疲れた人が緩慢な自殺を選択するケー